

第4章（2016年 金の年）

リオ五輪に沸き、東京五輪に希望を託した
「金」と、政治と「金」問題に揺れた年。

（公益財団法人 日本漢字能力検定協会発表から）

2016.1.10 今日の日経歌壇から

ありふれしことを喜ぶ今年また人参数多冬日に光る

（松戸 吉田正男） 選者・三枝昂之

選者評：新しいことの境遇もうれしいが年々変わらない出会いもまた格別。作者のそれは人參。店先でもいいが収穫間近の畑の風景を想像すると季節の感激が一步深まる。

⇒私の同年配の友人は、ほとんど全員がリタイア組。その生活を分類すると、現役で仕事をしている者は少数。職場を定年退職後、過去の勤務経験を生かして、地域の公職やボランティアの役職をしている者も今は少数。この者たちは、すでにそのような村役街役は既に終わっているのだ。中には、小学生の登校、下校の案内などで、毎朝頑張っている者もいる。

地域の社会学習に参加している者は元気いっぱい。健康老人大学や大学院で趣味や知識を深めている。ふれあい喫茶など地域の友好、団らんを楽しみにしている者も多い。

70歳を過ぎると、ほとんどの人は病気との付き合いが増える。かかりつけ医や、地域の病院で出会う機会が増える。この話題は途切れない。

かれらが日々感じていることは「ありふれし日常を喜び、感謝すること」だ。お互いの家族のこと、地域のことなど話題は

いつも同じだが、これは幸せな証拠なのだ。

リタイア後、畑づくりに精を出している者もいる。蕎麦、麦、野菜、特に、大根、白菜、ニンジン、キャベツまで作る本格的な農家もいる。イチゴを育てている者もいる。私のように畑仕事のできない者はいつももらってばかりだ。

しかし、これがうれしい。今年の大根、白菜、ニンジンの出来はよい。イチゴも豊作らしい。果物、特に柿とかんきつ類は生り年で美味しい。それに最近、季節を話題にすることが増えた。私の年代になると四季の変化は楽しみだ。四季の花木やその香り、食材の話題も尽きない。

たまには、難しい経済の話題も刺激があってよいが、ありふれた、当たり前前の生活をエンジョイする話題が一番。でも、当たり前でないことが起こり苦しむこともある。今日も周りのみんなに感謝して「ありふれしことを喜ぶ」一日が終わる。

2016.1.17 今日の日経歌壇から

山々の稜線くっきり見える日はブレてはダメと我を鼓舞する
（直方 石井真久良） 選者：三枝昂之

選者評：山と向き合って心を正す。山は神でもあることを再確認。

⇒私の住む加東市のどこに行けば、神さまのいる山の稜線が見えるのだろう。旧滝野町と加西市、西脇市の境にある光明寺五峰山の五つの峰は、中国自動車道の下り、東条インターから滝野社インターまでの間で、夕方に見るのが一番美しい。西日に映える五峰山の稜線は絶景だ。阿弥陀如来の「西方極樂浄土」を想像して、思わず手を合わせたくなる。

65歳を過ぎたころから、体調不良や病気で入退院を繰り返し、

神さまや、仏さまに、病気快癒をお願いする機会が増えた。今日の日経特集「国民病からみる戦後社会」から「国民病」の変遷と高齢者の病について考えてみよう。

・病は、時代と社会の相を映している。長らく日本人の代表的な「死病」だった結核や脳卒中が減り、1981年以降は、がんが死亡原因の1位に。高齢化に伴い認知症は増加の一途をたどり、感染症の脅威にも繰り返さらされている。

・厚生労働省の人口動態調査によると、脳卒中は1951年から80年まで日本人の死因の第1位を占め、現在でも年間約11万4,000人が亡くなる。寝たきりになる原因として最も多い。戦後70年を遡って「国民病」の変遷をたどると、病を生み出す背景と将来の課題が浮かび上がる。

・1981年以降、死亡原因で1位のがんには現在も年間約98万人が罹患し、約37万人が死亡する。人口10万人当たりの死者数も右肩上がりが増え、2014年は50年の約3.8倍。国民病の代表例だ。

・このままのペースでは高齢化がピークを迎える2025年には、700万人超が認知症になる——。厚生労働省はこうした推計を15年1月に発表した。

⇒その他、結核、肺炎・気管支炎、胃腸病など感染症は、先進国ではすでに減少。高度成長期に社会問題となった公害病も減少している。最近の病気による死者数は、がん、心疾患、脳卒中、肺炎、結核の順だ。

がんはすでに罹患すみ。心疾患は若い時から本態性高血圧で治療継続中。その他、脳卒中も感染症もみんな怖いけど、私がいま一番恐れているのは「足腰が弱って歩行が困難になる運動器症候群（ロコモティブシンドローム）」と、転倒・骨折など加齢に伴う傷病だ。元々弱い足腰がさらに弱くなる。毎日、神さま、

仏さまをお願いして「ブレてはダメと我を鼓舞」して歩行訓練に頑張っている。

「山々の稜線がくっきり見え山は神でもあることを再確認」できるところに行ってみよう。どこか近場で。

2016.2.15 日経歌壇から 日経2/14

生涯に何度書くだらう「愛」と書く人強し

（東京 田中有芽子） 選者：穂村 弘

選者評：学校でも病院でも銀行でも、その人は生まれてから死ぬまで「愛」の文字を書き続けるのだ。

⇒最近、自署が必要な書類作成の機会が増えた。この歌の作者は有芽子さんだから、自分の名前以外に、何回も何回も「愛」の文字や「愛」を含む文章を書きたいということだろう。

ところで、毎年、その年に生まれた子どもの名前が発表になるが、2015年に生まれた赤ちゃんの名前で一番多かったのは、男の子は、「陽」くん。女の子は「愛」ちゃんだった。

名前はひらがなばかりではなく、漢字を充てることも多いので、振り仮名から探すと、男の子なら「あさひ あたる たいよう ひかる ひさし」君が多い。女の子なら「おしむ とわまな まなぶ らいと」ちゃんが多い（スマートフォン向けアプリ「赤ちゃん名付け」を提供するリクルーティングスタジオ11/6から）。

太平洋戦争が終わった昭和20年に生まれた子は、男なら「勝 勇 進 清 達也」がベスト5。女の子なら「和子 幸子 洋子 節子 弘子」がベスト5だった。

名付け親が誰であれ、命名をしたときには、その子がよい生涯を送ることを期待して命名しているのだが、最近生まれる赤

ちゃんの名前には分かりにくいものが多い。ただ、2015年に生まれた赤ちゃんに「愛」ちゃんが一番多かったことはうれしい。「愛」を相手に対する深い思いやりだと広く考えれば、現代の世相に一番必要なことは「愛」なのだから。

私の好きな文字は「明、和、幸」の3文字だ。「世の中を明るくする。世界を和やかにし平和にする。そして、みんな幸せになる」。これを女の子の名前にすると「あっこちゃん、かずちゃん、さっちゃん」とみんなから可愛がってもらえる。私の貧相な文学的表現でも理解を得ることができるだろう。

市の広報紙などで、「生涯に何度も書きたい好きな字」を募集すれば何という字がベスト5になるのだろうか。作者の言う「愛」や、「明」「和」「幸」。さらに、「夢」や「浪漫」は選ばれるだろうか。生きていくのに厳しい「試練の連続」の時代が続いている。

2016.2.22 酒米「山田錦」誕生80年 今日の日経から

酒米の王者「山田錦」が誕生し、今月27日に80年を迎える。兵庫県で品種開発され、近年は純米吟醸など高級酒向けに引っ張りだこだが、産地の広がりがかつて8割以上あった兵庫産のシェアは急激に低下した。そこで地元は巻き返し策に着手。品質を高めながら増産し、「山田錦といえば兵庫産」という認知度を高めようと、オール兵庫でブランド構築を急いでいる。

⇒これは今日の日経全国版の記事だ。山田錦の生誕地多可町、六甲山の北側に広がる「山田錦」の主な産地（北播磨の大部分が含まれる）、酒蔵が集積する神戸、西宮の地図が大きく掲載されている。北播磨の住民にはうれしいことだ。

・兵庫産山田錦は年々品質が高まり、増産体制も整っている。

・山田錦は高級酒人気を受け需要が高まり、産地は30以上の府県に拡大した。中でも新潟県の15年の生産量は13年の40倍に急増。兵庫産の全国シェアは11年の76%から15年は62%まで下がった。

・次の一手は地理的表示制度の申請だ。風土に裏付けされた農産物を認定するもので、欧州ではワインなどのブランド振興につながっている。

・酒米は従来、自由に生産量を増やせなかった。しかし、国は2014年産から生産枠を超える酒米の栽培を認め、これが山田錦の増産に拍車をかけた。今後は環太平洋パートナーシップ協定(T P P)による外国産米の流入、18年の減反廃止などで主食米の価格が下がる可能性がある。酒米への期待は高まるばかりで、全国でこ入れの動きが相次ぐ。

・T P Pによって日本酒は米国やカナダの関税がなくなる見通し。海外でも人気の高級酒の輸出がさらに拡大すれば、山田錦の需要も増えそうだ。

⇒酒米振興は、地元のみより農協、J A全農兵庫、酒造会社老舗の辰馬本家酒造はじめ、灘などの酒造会社26社が加盟する灘五郷酒造組合の理事長を務める嘉納健二・白鶴酒造社長は「灘には震災を乗り越え80年にわたり築いてきた酒蔵と農家の信頼関係がある」と指摘。「地元産の酒米を使い続けてきた物語をオール兵庫で全国、世界の消費者に伝えたい」と意気込んでいる。

酒米生産現場では、「酒米への転作が増えれば値崩れしかねない」との声もあり、これを「山田錦バブルになっていないか」と気をもむ関係者もいるようだ。そうならないために、兵庫県、地元自治体、J A、集荷業者、大型農家、兼業農家を含む「オール農家」の知恵と底力に期待したい。

オール兵庫で「山田錦」ブランド構築を急ぐことはもちろん、農家の大半を占める兼業農家に、さらなる耕作技術の研修、伝達が急がれる。酒米づくりのおいしい話を聞かされても、兼業農家には、「稲穂が長く、作りにくい」ことが染みついており、相変わらず地域の在来種の減反を続ける農家も多い。兼業農家のみなさん、頑張ってください。

北播磨地域では、明治末期から大正にかけて「山田穂」という酒米が栽培されていた。これは茎が長くて倒伏しやすく収量も比較的少なかったようだ。

「山田錦の歴史」は、「大正12年、兵庫県立農事試験場（現在の県立農林水産技術総合センター）で、「山田穂」と「短稈渡船」を交配し、昭和3年に酒造米試験地（現在の酒米試験地：現加東市）で産地適応性の試験が行われ、昭和11年に「山田錦」と命名され本県の奨励品種となった」（兵庫県のHPから）。

従って、山田穂の生誕地は多可町、山田錦の生誕地は加東市かと思われるが、日経全国版では「山田錦」の生誕地は「多可町」となっている。

傍白

山田錦の生誕地は加東市というのは、間違いです。理由は、お米の品種は母系で繋がっていく。白鶴酒造（株）が山田錦を更に改良した酒米「白鶴錦」も発祥地は多可町だ。試験場は人間で言えば産科の病院。仮に多可町に住む私の息子夫婦の子ども（孫）が西脇市民病院で生まれたとしても、出生地は西脇市ではなく多可町になる（多可町長 戸田善規氏）。

2016.2.25 理系か文系か 今日の日経から

大学で理系学部に進学した人は、文系学部に進学した人より

学びたい分野や将来希望する仕事が明確。経済産業省の調査で、こんな結果が明らかになった。理系が長期的な視点で学部選びをするのに対し、文系進学者は「理数系科目が苦手」「有名大学に入りやすいから」など現実的な理由が多かった。

⇒経済産業省の調査では、「文系か理系か」を選ぶ際に「学びたい分野との関連性」を重視した割合は、理系が35.4%に対し、文系は28.9%。「将来希望する仕事との関連性」では、理系（13.1%）は文系（7.1%）を上回り、経産省の担当者は「理系は長期的視点で学部を選ぶ傾向が強い」と分析する。

⇒高校卒業時の18歳で「将来希望する仕事が明確」だとは考え難い。「将来希望する仕事との関連性」で、理系（13.1%）、文系（7.1%）と極めて低いにもかかわらず、「経産省の担当者は、理系は長期的視点で学部を選ぶ傾向が強い」と分析している。

・「関連科目の成績が良かった」ことを理由に進学先を選んだ人は、文系（30.7%）が理系（27.3%）を上回った。文系であれば国語や地理歴史、理系なら数学など、入試科目の得手不得手を理由とする割合は文系が多い。

・「有名大学への入りやすさ」も文系（15.5%）が理系（12.2%）より高かった。私立大文系は入試科目が絞られている学部が多く、経産省の担当者は「受験科目を意識し、自身の興味や関心以上に、現実的な選択をした生徒が多かったのではないかと話している。

⇒成績がよいというのは「得意な科目、好きな科目」の裏返しだ。従って、「成績が良かった」から進学先を選んだ人が多いのは当然。文系の方が、「自身の興味や関心以上に、現実的な選択をした生徒が多かった」のは文系の方が入りやすい大学が多いからだろう。

要するに、高校卒業時の18歳で「将来希望する仕事が明確」だとは考え難い。大学進学率が50%を超えた今日、性急に大学進学と将来の仕事を結びつけて考えることもない。

高校卒業の時点で、将来、学者や研究者、高度専門職、文筆家などになる「純粋理系」や「純粋文系」の数などしれている。ほとんどが「よく分からない」のだ。

進学したい大学は、好きな分野、(どちらかと言えば)得意な分野から選べばよい。好きでも得意でもない分野の仕事など苦勞多くして、面白くない。とりあえず、入れる大学に入学することも構わない。将来希望する仕事は、大学入学後に決めればよい。ただ、18歳で将来の職業が決まる「医・歯・薬・看護学部」は別。大学進学希望の諸君。将来の仕事選びは慎重に。

2016.3.1 朝日歌壇から 朝日2/29

二度とない人生なれど四半世紀介護に明け暮れこれも又よし
(狭山市 若松吉弘) 選者：佐々木幸綱

選者評：最近多くなっている介護の作のなかで、進行性核上性麻痺の妻の介護に取材したこの作のたんたんとしたうたいぶりに注目。

日本の戦後を背負い来しわれらケアに集えり深海魚のごと
(相模原市 日野一閑子) 選者：高野公彦

選者評：老後に知る国の冷たさ。作者九十三歳。

⇒介護をする家族と介護を受ける本人とでは、介護の捉え方が異なるのは当然だとしても、第一首の作者の若松さんはエライ。四半世紀もの間、妻の介護をして「これも又よし」と言う。これは誰にでもできることではない。介護を受ける本人は、たとえ口に出さずとも、妻は心底から感謝している。これが、分

かるからこそ、「これも又よし」と「たんたんとしたうたいぶり」になる。

第二首の作者は九十三歳になり、ケアに集う同輩を「深海魚のごと」と言う。日本の戦後を背負い来し誇りとケアを受ける身(の情けなさ)が交錯するのだろう。

ところで、作者はケアに来ている自分を「深海魚のごと」にどんなイメージを重ね合わせたのだろうか。見てびっくり、グロテスク、奇妙な形…ではないだろう。私の知る深海魚には「美味しい。味わいがある」などのよいイメージがある。高齢者のイメージはこれでは足りない。

最近、介護施設での身体拘束や、虐待から殺人事件までひどい事件が続いているが、高齢社会の今日、介護をする家族と介護を受ける本人の双方の気持ちを汲み取り、介護施設を含め社会全体で考えたい重要な政策課題だ。

2016.3.28 社会福祉法人改革 今日の日経・経済教室から

社会福祉法人の経営改革を促す社会福祉法改正案が今国会で成立する見込みだ。社会福祉法人制度の構造を変える大改革である。重要なポイントは、

- (1) 余裕財産があると判定された社会福祉法人(社福)に社会福祉充実計画の策定と実行を義務づける。
- (2) すべての社福の財務諸表データベースを構築する。の2つだ。

⇒今日は、社会福祉法人(社福)加東市社会福祉協議会の役員会に出席した。加東市社協は多くの社会福祉事業を行っており、加東市民にはなくてはならない組織、団体になっている。

社会福祉法人が行う事業は、施設型事業では、高齢者事業、保

育事業、障害者事業、児童事業などに多様化しており、加東市社協は、高齢者事業を営む社会福祉法人である。もちろん、それ以外の社会福祉事業、公益事業、収益事業をも営んでいる

ところで、社会福祉法人のうち、内部留保が問題視されている施設経営社福の数は約2万。自治体所轄と厚生労働省所轄を合わせて約1万8千にのぼる。

・(社福)の合計収入4兆3,000億円に対する平均経常利益率は4.4%。その特徴として、毎期収支トントン近くまで財源を使い福祉ニーズに込んでいる模範的社福がある半面、高利益率を謳歌している社福が多数存在することが挙げられる。

・(社福)の合計総資産10兆2,000億円のうち金融資産が占める割合は25.5%、そこから借入金差し引いた純金融資産の割合は10.6%。純金融資産額は1兆800億円だった。

⇒施設を経営する社福全体の純金融資産(余裕財産)は2兆円に達すると推定される。業界関係者はこれまで「内部留保は固定資産取得に使っており現預金は少ない」と主張してきたがこれが事実と反する説明であることが明白になった。

このたびの社会福祉法改正案は、この余裕財産があると判定された社会福祉法人(社福)に社会福祉充実計画の策定と実行を義務づけ、余裕財産を社会福祉事業に振り向けるように仕向ける。ただ、余裕財産を判定する基準の決め方次第で、「適用除外」もあり得るが詳細は分からない。

(社福)社協の余裕財産には、100%税金を原資とする過去の黒字が蓄積した施設経営の社福とは性質のことなる「基金」などが含まれているので、今国会で成立見込みの社会福祉法改正案と今後の具体的運用に留意し、今後の対応を十分、検討しなければならない。

※社会福祉法人による施設型事業が急増したのは、平成12年から介護保険事業が始まったことによる。自治体の(社福)社協事業はそれ以前から行われており、平成12年当時に、既に多額の基金を有していた社協が多い。

その原資は、社協事業の使用料、利用料ではなく、物故者家族による香料からの善意の寄付であった。これは、今回、改正の対象となった余裕財産とは性質が異なる。改正法において、余裕財産の「適用除外」となることを期待したい。

2016.4.10 今日の朝日歌壇から

いつまでも普通の花でいてほしいこの日本の桜も菊も

(三郷市 吉村 薫) 選者：永田和宏

選者評：菊も桜も特殊な象徴性を纏わされた時代があった。普通の花である世が続いてほしいと。

⇒作者は、普通の花でいてほしい日本の花を「桜と菊」だという。私が、最初に浮かぶ桜のイメージは。若い特攻隊員だ。

・「太平洋戦争末期の1945年、旧姫路海軍航空隊の鷓野飛行場(加西市鷓野町)から沖繩へ出撃し、戦死した特攻隊員63人を追悼する法要が9日、地元の大願寺で営まれた」(今日の神戸新聞)。

⇒私たちは、桜の散りぎわの良さに心惹かれ死んでいった特攻隊員による日本人の悲劇を、忘れてはならない。これが桜の特殊な象徴性のポイントだ。

ところで、今や日本は桜の国として、世界に認められ、桜は日本人の一部になっている。お花見の話題から2題。

北播磨各地の「桜づつみ回廊」の桜が満開だ。これは、川を身近な自然として愛し、安全で美しい県土を創出するとともに、

地域交流を深めてもらいたいという願いを込めて、平成3年度から平成12年度にかけて、瀬戸内海から日本海を結ぶ延長約170キロの河川沿い（武庫川～篠山川～加古川上流～円山川）を約5万本の桜で整備した美しい桜回廊だ（兵庫県のHPから）。

米国の首都ワシントンDCの中心部を流れるポトマック川岸には、春になると2,000本もの桜が一斉に開花する。このポトマック川の桜は、兵庫県伊丹市で育った苗木を移植したもので、太平洋戦争中ですら切り倒されることはなかったそうだ。

次に、菊のイメージとして浮かぶのは、日本皇室の御紋章（十六菊）だ。その他、勲章にも菊の紋が押印されている。パスポートの紋章や、五角形の「日章」が採用されている日本の警察のシンボルマークも菊だ。

現在では、桜や菊の特殊な象徴性は、外国にも認められた日本の国花だということだ。日本には公式に定められた国花（Floral emblem）はない。広辞苑では『桜または菊』と記載されているから桜も菊も日本の国花なのだ。

桜も菊も、過去にあった特殊な象徴性を纏わされないで、いつまでも普通の花でいてほしい。この国はすでにその通りのよい国になっている。戦争をする国になってはいけないのだ。

2016.5.1 今日の日経歌壇から

セーターの下に隠れたシャツボタン閉めたか不意に触れたく
なり（さいたま 石田恵子） 選者：穂村 弘

選者評：〈私〉自身にしかわからない微細な不安。そこに生の実感がある。

⇒古希を過ぎた頃から、自分にしかわからない微細な不安が増えた。出かけるときの電気やパソコンのスイッチ、施錠など、

しっかり確認してからでない不安で仕方がない。事務所の業務の段取りや確認で、夜中に不意に思いだし、寝られないこともある。その都度、指呼確認と同じ要領で、小さな声で確かめることを心がけている。人には言えないことのひとつだ。

不意に気になることといえば服装、ネクタイ、ズボン、背広のボタンなど。特に人に出あうときは気を使う。ところが、気をつかったつもりでも全くなっていない。恥ずかしいくらい不細工。服装は上下の組み合わせ、ネクタイは、色や柄ばかりか、曲がっていないかどうか。ズボンはきちんと上がっているかどうかなど。

小さいときから、人目にも不細工な歩き方で、始終恥ずかしかった。杖なしで歩けたらよいな。まっすぐ歩きたい。誰もがができることが自分にはできない。

最近でこそ、私のことをジロジロ見る人は少なくなったが、情感の遣い場のない涙の多感なころは、人知れず、他人の凝視に耐えてきた。母親はいつも私の杖を布できれいに拭いてくれた。家内は今でもズボンを上げてくれる。物言わぬ家族の何気ない小さな動作にいつも反省している。

服装でいつも感心するのは、政治家、特に首相、著名大臣など、たぶん、いつもスタイリストがついて、こまめに手直ししているに違いない。服装と装飾品はもともと高級品。帽子から、服装、装飾品、時計など、上から下まで合わせるといかにほかかっているのか。

著名実業家といわれる人も、富裕層といわれる人もみな同じだろう。これで、運転手つきのベンツに乗り移動する。もちろん、そうでない人も大勢いる。地位が高級を要求するのはよく理解しているので、そのことを批判する気持ちは全くない。

だれにでも、いつでも、その人自身にしかわからない微細な不安がある。有名政治家や著名実業家の毎日の活動は、「微細な不安」どころか、「巨大な不安」の連続だろう。普通の無事平穏な生活がおくれることに感謝したい。

2016.5.22 今日の日経歌壇から

いつまでもいつまでも成長しなければいけない数字GDP

(高岡 野村あけみ) 選者：三枝昂之 選者評：なし

⇒作者は、日々の新聞を見て、「いつも、いつも経済成長、経済成長、GDPの伸び率こそが経済を回す唯一の尺度だ」に疑問を抱かれたかも。

経済成長至上主義と市場経済主義、さらにその特徴と弊害について短く所感をまとめるのは難しい。

私が、大学で経済学を勉強したのは、「教養の経済学」と「経済政策」。その後、会計士試験の受験のための経済学は主に「ケインズ経済学」と受験のための「経済原論」であった。

もともと日本の経済学は、マルクス経済学と近代経済学の二つに分かれ、主にケインズ経済学だけが、近代経済学といわれていた。戦後、日本の大学ではマルクス経済学研究の勢力が強くなり、私が大学に入学した頃は、近畿圏の大学では、大阪市立大学や立命館大学が「マルクス経済学」、阪大、神大が「近代経済学」と分類されていた。今やマルクス経済学は見ると影もない。

随分あとになって、東大の宇沢弘文という偉い経済学者の経済成長論を知ることになるが、著書も分厚く難解で、私には読了できるレベルではなかった。

宇沢先生の「経済成長至上主義（効率化第一）の弊害」の指

摘（経済活動に環境がはたす文化的、社会的な機能への無配慮）や、社会共通資本の概念は、よく理解できなかったが、何となく情緒的にわかったつもりになっていた。

今日の短歌を詠みながら、「経済成長至上主義を再考すべきとき」と感想をまとめようと考えたが、経済学の論理で所感を書くことは難しい。

ただ、経済成長を示すGDPだけが幸せの基準ではない。幸せに基準はほかにもあることは理解しておきたいと思う。例えば、ブータンは世界の最貧国のひとつで、所得やGDPの尺度では下位国。そこで1972年頃から「国民総幸福量」という概念を提唱し、世界にこの考え方をアピール。

世界一貧しいウルグアイのムヒカ前大統領の2012年のリオ会議での演説、「私たちは発展するために生まれてきているわけではありません。幸せになるためにこの地球にやってきたのです」などを思い出している。

今日、日本をはじめ、多くの先進国が重債務国。この重債務の窮地から脱するために経済成長は必要だ。

世界最悪の重債務国になってしまった日本。経済成長以外、この窮地からの脱却は（ハイパーインフレなど異常な政策を除外すれば）不可能だ。

「いつまでもいつまでも成長しなければいけない国、日本」は幸せな国になるために、日本のGDPはくたばってはいけないのだ。

2016.6.5 今日の日経歌壇から

墓石の朱名の刻まれて次なる死者の吾が名が光る

(香川 松繁美吉) 選者：穂村 弘

選者評：「次なる死者」という捉え方が詩を生み出した。

⇒昨年、享年97の母を送り、32年前から父の眠る地域のお墓におさめた。墓石の裏の朱名は長男の私だ。と言っても私が建てたのではない。父が生存中に建てた。江戸時代から続くような旧家でも名家でもない新宅家だから、父は自分の墓を建てたのだ。祖本家と本家の墓は別にあるから、死後も新宅家として独立したかったのだろう。

最近、無縁仏が増加し、墓のない家が増えている。墓石業者に聞いたが、新しい墓をつくる工事より、墓を取り壊す工事が増えているという。お墓を持たず、菩提寺以外の寺院の永代墓、合同墓にお骨を納める人も増えている。なぜ、こんなことになったのか。

理由は生活の変化だ。世界一の長寿国になり、配偶者や親の介護に時間、金、手間ばかりか、精神的な負担が重くのしかかり、家制度が崩壊、形骸化して親子が向きあう機会が減り、老々夫婦、ひとり老人世帯が増えている。

子は、親が教育にカネを掛けてくれたことはよく理解しているが、今は、自分の生活と子どもの教育に精いっぱい。その多くは、故郷を離れ、都市部で暮らしている。その理由も簡単、職場は都会、配偶者、子どもはみんな都会人になってしまっているからだ。

老いて、親への恩返しなどしたくてもできない環境になってしまっているのだ。大学進学率が50%を超え、地域の公立高校から都市部の大学に入った子どもはもちろん、地方に留まってくれた子どもの孫もこのようになっている。

戦後、長男は家をまもるため、普通高校、農業高校、工業高校を卒業して、村役場や、国鉄（JR）や地場企業に勤めた。公

務員初級試験（国家、地方）に合格して公務員になった人も多い。中には、教員（助教諭）になった人もいる。その後、地方で就職できる機会が減り、高卒時の過半数が都会の大学、都会の勤務、配偶者も都会人、孫は生まれたときから「都会っ子」になっている。

したがって、高齢になっても、親から子どもに介護など言いたせない。他人には、「子どもに迷惑をかけたくない」と言っているが、心の中は寂寥感でいっぱい。親がなくなれば子が幼児期を過ごした自宅建物は「故郷の廃家」になり、田畑は耕作放棄になる。よくある普通の光景だ。

これが成熟社会の実態なのだ。親が子を育て、教育する。子は長じて親に恩返しする習わしが消え、「孝行をしたいときには親はなし」どころか、「孝行を期待する親もなく、子は孝行をしなくてもよい」のだ。

「墓石に朱名の刻まれている次なる死者」子や孫にお願いしたい。この家のお墓をまもり、せめて、春秋、盆暮れの墓参りを欠かさないでほしいと。

2016.6.6 今日の朝日歌壇から

六人兄弟のめる奴から先に逝き呑まぬ長男九十七歳

（長井市 滝川知市） 選者：高野公彦

選者評：作者がその97歳。自負というより哀しみの歌であろう。

⇒作者はお酒をたしなむことを「飲む」を使わないで「呑む」を充てている。たぶん、これは、「がぶがぶのむ」の意だろう。生涯酒をたしなまなかったから97歳まで生きたのか、酒が飲めなかったから長生きできたのかは分からないが、酒が飲めなか

った悔しさを「呑む」に求めたのだろう。

私は、成人して自分のお金で酒が飲めるようになった25歳位から、ほぼ毎日アルコール類を飲んできた。日本酒、焼酎、ビール、ワイン、ウイスキー何でも飲める。若い時に、どこで飲んでも「ぼったくり」に遭わない、値段が手ごろの2つの理由から、ビールが大好き。ほぼ毎日、大瓶1本飲んだ。

70歳直前になって、前立腺がんの放射線治療を行った。その後も「Every day beer」をやめなかったが、昨年10月、消化器がんの摘出手術を受けてからは、さすが、命と引き換えの飲酒ならやめようと決意した。主治医は「量が過ぎなければいい」と言ってくれたが、ここは辛抱、辛抱と「断酒宣言」をした。ただ、最近は断酒宣言を「新しい判断」に変えようとしている。

・ある母親と子どもの会話。「遊ぶのは宿題を済ませてからって、約束したでしょ」「お母さんごめん。まず遊んじゃおうって、新しい判断をしたんだ」。はたまた妻と夫は「あなたきょう休肝日じゃないの?」「いやいや毎日飲むぞ。これは新しい判断だよ」。

・いま、巷でネット空間で、こういうジョークがはやっている。発信源はもちろん、われらが安倍首相だ。消費増税の先送りを表明した先日の記者会見で、安倍さんは今回の展開を「新しい判断」と言いつくろった。気持ちはわからぬでもないがちょっと苦しい。今年の流行語大賞に入るのは間違いなし、なんて声もある（今日の日経コラム・春秋から）。

⇒「ふっふっふ。なるほど」、だから、^{かじん}家人も、私が、ビールを飲む「新しい判断」を理解してくれるだろう。

ところで、消費増税の先送りという「新しい判断」を導いた官邸のシナリオ、一体だれがライターなのか。電通か博報堂のス

タッフかと思いたくなる。まさに今年の流行語大賞ものだ。最後に春秋子の意見を聞こう。

・政治家が増税から逃げるのは、過去にそれでひどい目に遭ってきたからだろう。けれど人口減、少子高齢化がこんなに深刻な時代だ。世間の考えだって昔と同じではない。将来不安を拭うためには何が必要か、じつは有権者も気づきはじめていることに気づいた方がいい。そういう「新しい判断」をこそ期待したいのだが。

2016.6.21 新聞歌壇から

流れゆく雲をみている初夏の風空の下の不思議さ又美しき

（船橋 加藤けい子） 選者：三枝昴之 選者評：なし

（日経歌壇6/19）

⇒夏の空は高く青い。初夏の風が頬に心地よい。どこか広いところで寝転がって空を眺めてみたい。

今秋、後期高齢者になる。何回もなんかいも繰り返してきた四季の風景が思い出される。終戦前年の夏、小児麻痺になり、自分の足で走り回った記憶はない。戦後、一時期、本家の離れ屋敷の粗末な家で過ごした記憶が残っている。

小中高と地元で過ごし、大学に入ってから10年、西宮、豊中、大阪で過ごした。その後、帰郷して、生涯小児麻痺の後遺症で、不自由ではあったが不幸ではない幸せな人生を過ごした。古希を迎える頃から大病を繰り返しているが、今は小康状態が続いている。毎日が感謝の日々だ。

初夏の風空の下の流れゆく雲のように過ぎ去った人生の不思議さ又美しきかなと感じ入っている。

貧しければ不思議さ又美しきまで豆植えし父は老いても花を
育てず

(佐世保市 近藤福代) 選者：佐々木幸綱 選者評：なし
(朝日歌壇 6/20)

⇒父は西村本家の次男であった。所有する田は、本家から分
け与えられた飯米田2枚と、父が戦地から送った陸軍軍人の給
金を貯め、祖母が買っておいてくれた田1枚であった。

戦後の一時期、家族で田植えをした。田の畔に、鍬の柄で小
さな穴をあけ、大豆を植えた。大豆の収穫以外にも田の畔の水
漏れを防止する目的もあった。

私は、田の作業は何もできなかったが、妹らは田植えや畔豆
植えを手伝っていた。嫌だとも貧しいとも思わなかったはずだ。
だから、老いて花を育てずという考えにはつながらない。貧し
い時にも花を育て、小さな幸せを感じていた。最近、各地の
公園に花が咲き乱れ、ご近所の庭先にも花が増えた。花のある
生活の豊かさを実感する。ブログに掲載されたお花を楽しんで
いる。

2016.7.3 今日の日経歌壇から

悠々とまではゆかず自適なり日々抗ふことなく生きて

(福山 廣本貢一) 選者：三枝昂之

選者評：「悠々」なしの自適がほどよい自足を思わせてかくあ
りたいと思わせる。

酒飲めば時間を忘れ眠りたりしかの幸せは病みて今はなし

(松戸 吉田正男) 選者：三枝昂之 選者評：なし

⇒総務省が先月の29日に発表した2015年国勢調査(抽出速
報)によれば、総人口に占める65歳以上人口の割合26.7%とな

り、イタリア(22.4%)及びドイツ(21.2%)よりも高く、世界
で最も高い水準だ。

65歳以上人口のうち、単独世帯の人口は562万6,000人で、65
歳以上人口に占める割合は16.8%だ。また、65歳以上の男性の
うち8人に1人、65歳以上の女性のうち5人に1人がひとり暮
らしとなっている。

国勢調査統計で明らかになるばかりか、ご近所さんを見回し
ても、高齢者が家族に見守られて、穏やかな晩年を過ごす幸せ
な人生の幕引きの想定がしづらくなっている。特に、高齢者
の単独世帯、ひとり暮らし高齢者が増えていることにおどろく。
老々介護など身の回りにありふれて、全くの日常茶飯。

高齢者には、若い世代に頼らず、家族にすがらず、できる限
り自分の面倒は自分でみる。できるだけ長く自立する自覚が求
められている。それでも、自立した生活が不可能になり、複雑
な医療や介護を受けることになれば、独立自尊をあきらめ、社
会の制度に従いお世話になる。

高齢者の求める悠々自適の生活は、死ぬまで現役の政治家や、
学者・評論家などの著名人やプロフェッショナルではない普通
の国民には、「キョウヨウ」「キョウイク」が、ほどよい自足を
与えてくれる。「今日は、川柳の会、明日はグラウンドゴルフ」
に行く用事がある(今日は用がある。今日は行くところがある)。

それができなかつたり、できなくなつたりで、「今は病みて、
酒飲めば時間を忘れ眠りたりしかの幸せ」を思い出すことにな
る。老いの生き方など他人事だと考える自信がなくなり、普通
の高齢者はみな同じだと思うようになる。

私は、今から7年前、強度の腰痛を経て、化膿性脊椎炎で入
院。マジックベッドで抗生物質の大量投与、4年前には、前立

腺がんの放射線治療で入院。昨年10月には、消化器がん摘出手術で入院した。今は術後の経過観察中で、抗がん剤による補助療法は行っていない。退院後は歩行に不自由しているが、元気になり、毎日事務所に出ている。昼間の空いた時間にプールで水中歩行とスイミング、事務所の周りで歩行訓練が日課だ。すこしでも長く自立する心だけは忘れたくない。

65歳を過ぎたころから入退院を繰り返し、病気無縁の元気な高齢者をうらやましく思うこともあるが、今はここまで快癒したことに感謝している。

2016.7.17 地元に戻ろうⅠ 今日の神戸新聞から

NHKのドラマ「あまちゃん」に、こんな挿入歌があった。
〈地元に戻ろう 地元で会おう／あなたの故郷 私の地元〉。地方から東京に出てきたアイドルたちが歌っていた。

・地元に戻ろう。人口循環、小東京。そんなアイデアを、そろそろ都知事が出してもいい。後出しでもかまわないから（神戸新聞・正平調）。

⇒私は1980年1月1日の新東播紙に「帰省中の青年に訴える」をテーマに以下のとおり書いた。

・在郷の青年の一人として考えることは、都会へ出て勉学を終えた、あるいは一定年限の就業を終えた青年を、そこに永住させる前に、もう一度Uターンさせられないものだろうか。能力と体力のある者は、そのまま都会に残って成功するもそれは結構。ただ当然の如く都会に職を得て永住する前に、もう一度郷土のよさとその発展を考えてみてほしいということである。

※この提案に対する私の主張はことごとく裏切られている。

地方の青年の多くは都市部に移り住み、都市部に勤務してい

る。郷土に帰って新しい事業を起こす人は少ない。これは日本全国で起こっている現象であり、人口の都市集中と、地方の高齢化率を著しく高めている。都市集中を排し、地方を活性化して地方に雇用の機会を設け、人口移動の流れを大きく変えないことには、この国の将来は危うい。（※以下2012.2.25追加）

ずいぶん前の主張を読み返しながら、今日の正平調子の意見「地元に戻ろう。人口循環、小東京。そんなアイデアを、そろそろ都知事が出してもいい。後出しでもかまわないから」に、何をいまさら…の感がする。

特に、老後の福祉や介護の社会保障費用を負担することになる地方は、「定年後は地元の田舎に戻ろう」などと言われては困るのだ。地元に戻らば、都会に持つ全財産を処分して、お金持ちになって帰ってきてほしい。

そうでなかったら、都会の自治体は、定年後にかかる高齢者給付を地方に負担させず、Uターン前の自治体で負担していただきたいのだ。

〈地元に戻ろう 地元で会おう／あなたの故郷 私の地元〉を呼びかけるのは地方であり、その相手は「都会へ出て勉学を終えた、あるいは一定年限の就業を終えた青年」なのだ。これで消滅可能性都市が救われるのだ。

2016.7.21 地元に戻ろうⅡ

・Uターン解決策

よく考えてみると、私の意見には、政策的、行政的解決を除き解決策がない。まず、若いときに地元（田舎）に戻ってきても、就業場所がない。田舎の大企業、市役所とその関連団体、地域農協、地場企業は、高卒や大卒後、すぐに就職した同年輩者の

指定席だ。

配偶者を得ることも、その機会も少ない。あるのは住居と高齢者予備軍の両親、生家も古くなり建て替え時期にきている。これ以上議論が発展しない。

しかしながら、一体、誰がこの問題の解決策を考えるのだろうか。「当然それは自己責任だ」では、消滅可能性都市を指摘した増田寛也さんが都知事になっても地方はよくなるとは限らない。地方からの政策発信に期待している。

・人口減少・少子高齢化

人口減少社会の特徴は、人口減少に伴い世帯数が増え、世帯の人数は減少していることだ。さらに今や世帯の32.5%が1人だ（国勢調査速報値 2015）。

田舎の農家はどうか。若い後継者が結婚を機に家を出て住宅や店が集まる地域にアパートを借り、「実家」に通って農業をするスタイルが増えている（日経2016/7/16 経済气象台）。これは北海道の話だ。

北播磨の田舎では、専業農家が少なく、兼業農家が圧倒的に多いからこのモデルは参考にならない。どうしても実家の近くに住みたい若者が、大都市までの交通至便の地に自宅を建てるケースが増えているのが近年の傾向だ。

私の住む加東市で人口が増加している。加東市が東洋経済社の「住みよさランキング」上位になる理由のひとつでもある。

北播磨の田舎で農業ができる、農業で生活が維持できる方策がない限り、高齢になり、さらに1人になり「定年後は地元の田舎に帰ろう」の郷愁以外に田舎に住む動機がない。考えておきたい視点だ。

2016.7.24 今日の日経歌壇から

脚力は実年齢に正直ぞかって追ひ抜き今抜かれ行く

（長野 山口恒雄） 選者：三枝昂之

選者評：追ひ抜かれる現場に老いの実感がこもる。

⇒最近、高齢者が朝の散歩をしている光景に出あうことが増えた。速歩から、手を後ろで組み、ゆっくり歩く人までいろいろ。中には夫婦同伴の人もある。高齢者の健康実力は最初に足に現れるようだから、脚力は実年齢に正直なのだ。

私ごとながら、2歳半で小児麻痺（ポリオ）に罹り、生涯、歩くことに不自由をした。歩けなくなる不安は私にとって最大の恐怖だ。そこで最近、事務所脇に15メートルの手すりをつくり、毎日30メートルを3回に分け歩いている。ところが、これは体力を超える重労働らしい。ときどき膝痛になる。何でも、ほどほどにしないといけないと反省している。

7年前に「化膿性脊椎炎」になり、その治療のための入院（58日）、一歩も歩けなくなった。今後は車いすかと諦め、家の中は全てバリアフリーに、医者のお勧めもあり、介護認定を受けるといきなり「要介護2」、67歳の時だった。

その後、リハビリテーション病院に入院して（75日）、何とか歩けるようになり、介護保険は、一度も使わないまま再審査を受けず返上した。その後、何とか頑張っ歩いてる。たぶん、プールの水中歩行や遊泳の成果だろう。

・要介護度が低い「要支援」向けサービスの一部が、全国一律の介護保険サービスから市町村が運営する事業に移りつつある。地域で高齢者を支え、膨らむ介護費用の伸びを抑える狙いがある。だがサービスの担い手や質を確保できるのか。戸惑いもみえる（今日の朝日総合3）。

⇒要介護認定で、「要介護」（447万人）より軽い「要支援」（175万人）向け介護保険サービスのうち、ホームヘルプ（訪問介護）とデイサービス（通所介護）が市町村の「地域支援事業」に移る。全国一律だったサービス内容や料金は各市町村が決める。

2017年4月までに全市町村が取り組むが、16年4月時点で（先行移管）したのは全体の約3割。兵庫県では加東市と豊岡市の2市。その他の多くの市町村は準備段階だ。移行した市町村の「地域支援事業」の内容と料金は各市町村が決めるが「多くの市町村で何をどうすべきか戸惑っているが、これにより市町村格差が拡大する」（淑徳大・結城康博教授）。

少子高齢社会の福祉、介護、子育て3分野のサービスの基盤部分は、全国一律が望ましいというのが私の意見だ。ただ、これでは数多くの施設ができた市町村の財政が圧迫される。従って、各市町村が独自に決めるように改正した。

何とも身勝手な計画性のない施策かと思う。また、北播磨の都市でも、今春、この3分野の上乗せサービス合戦が見受けられた。「追い抜かれる現場に老いの実感がこもる」介護の課題をみんなで考えてみたい。

2016.8.22 今日の朝日歌壇から

復員の父を迎えて言葉なく泣いてお辞儀をせし祖母の夏

（福山市 武 暁） 選者：馬場あき子 選者評：なし

⇒今年には終戦から71年。作者は復員してきた父の子か。祖母から伝え聞いた父の復員のことを想いだし短歌にしたのだろう。

私の父は、昭和8年1月、志願して陸軍に奉職。酷寒の満州国の地でソ満国境の守りにつき、長春、ハルビン、チチハル等

で勤務。その後、一旦帰国し、昭和12年の日中戦争に従軍。負傷兵となって昭和14年に帰国、津の33連隊に原隊復帰。快癒後は陸軍士官学校を経て内地勤務。昭和20年12月、郷土の滝野町に帰ってきた。

父の兄は、赤紙徴集で南方戦線に従軍、背中に大やけどを負って、父より少し早く復員してきた。2人しかいない男兄弟が、ともに日本国の守りについたので。家族はみんな2人の復員の幸せに歓喜したことだろう。

出征当時は健在であった祖父、祖父亡き後ひとり、跡取り以下2人の男子の復員を迎えた祖母の気持ちはいかほどのものであったか。たぶん、「言葉なく泣いてお辞儀をして」迎えたことだろう。称賛と感謝と涙のお辞儀に違いない。

父や伯父から戦争の具体的体験談を聞く機会はなかったが、戦後の混乱と窮乏生活の記憶を思い出して、私が、心に刻んでいることは、「戦争はしてはならない」この一言だ。理屈などいらぬ。確たる信念もなく、情緒的だと笑われてもよい。「絶対に戦争はしてはならないのだ」。

「戦争のない世界を目指して」美しいことばを羅列する偽平和主義者など最も軽蔑する人種だ。「お祈りで戦争がなくなるわけではない。だから、（世界平和と国家のために）憲法を改正して、戦争のできる国にする」。私には理解困難だ。

グローバル化が進み、IT、AI、ロボット技術と平和の配当と（それなりに）幸せな毎日の裏側で、「核軍縮の動きは停滞し、世界には1万5千を超える核弾頭が存在する。今年1月には北朝鮮が4回目の核実験を行い、『初の水爆実験に成功した』と発表した」ことに疑問と懐疑さらに怒りを覚えるのは、私ひとりではあるまい。

私は、広島や長崎の原爆記念館に足を運び、近くに住む被ばく経験者の話を聞き、本を読み、戦争勝者の身勝手な論理に抵抗を感じてきたが、いま、私たち日本人に求められているのは「オバマ大統領の歴史的な訪問を契機に核政策の見直しに向け、(具体的)行動に踏み出す発信力ではないか。

オバマ大統領が広島で言った「核廃絶と人類の和解」を実現する努力を続けなければならないと同時に、先の戦争を風化させてはならないのだ。

復員の子を迎えて言葉なく泣いてお辞儀をする祖母の気持ちを思い、今は父の「復員の幸せと感謝」で一杯だ。

2016.9.5 今日の朝日歌壇から

どんなもの生れしか先の戦争でなくせし数多の頭脳あれば

(東京都 西出和代) 選者：高野公彦

選者評：あの戦争で300万人以上の死者が出た。もし、生きていればその人々の頭脳からどれほど豊かな文明・文化が生まれたか、と惜しむ。

⇒8月22日のブログで 朝日歌壇「復員の父を迎えて言葉なく泣いてお辞儀をせし祖母の夏」(福山市 武 暁)を紹介、「今年に終戦から71年。作者は復員してきた父の子か。祖母から伝え聞いた父の復員のことを想いだし短歌にしたのだろう」と書き、後は私の父の復員について書いた。

その後、高校時代の友だちから「泣いてお辞儀ができた人は、幸せだったのですね。300万もの帰らぬ人の親族は、何十年も泣き続けもはや涙も枯れ果てた」と聞かされた。これには参った。父の復員を語るときには、欠かしてはいけない大切な視点が抜けていると心が痛んだ。

ずいぶん前になるが、阿川弘之の『井上成美』を読んだことを思い出した。最後の海軍大将といわれた「井上成美」は、海軍兵学校の最後の校長(栗田健男中将)から3代前の校長でもあった。彼は、長い間、せいぜい数百人であった定員を、太平洋戦争が始まった昭和17年の採用は1,000人超、さらに翌年には3,000名超とし、最後の募集は4,000人台にまで拡大した。

当時、海軍兵学校は、東京帝大と並ぶ有数の難関校で全国の俊英たちがこぞって志願した。小野中学校からも身体頑健の俊英が応募した。

以下、定員増の時代に海軍兵学校に合格。戦地に赴くことなしに終戦を迎えた同業の先輩土井康二郎先生から聞いた話など。

井上成美は、「もうその頃になると、戦争の将来がどうなるかはっきり見通しがついていました。仮に戦争に勝っても、戦後海軍に残るものは一部で、相当数は社会に出て働かなくてはならない。まして敗戦の場合はなおさらです。戦争だからといって早く卒業をさせ、未熟のまま前線に出して戦死させるよりも、立派な基礎教育を今のうちに行い、戦後の復興に役立てたいというのが私の本意でした。しかし、敗戦の事などは口に出して言えるものではありませんでした」と語っていたという。

すごい校長(指導者)がいたのだと改めて思う。トップに立つ人間が後に評価されるのは、常に前を見るするどい観察力とたぐいまれなる実行力だ。

あの戦争でなくなった300万人もの人々の頭脳からどれほど豊かな文明・文化が生まれたことか、と惜しむ一方で、戦争で運よく生き残り、終戦後の混乱期を切り抜け、戦後復興を支えた多くの人々の努力にも頭が下がる。

なお、敗戦時には軍人・民間人計660万人以上が海外に在住し

ていた。その内1946年末までに内地に引揚げてきた日本人は500万人。後は外地に残留したといわれている。高校同級生の女性退職教員の藤原康子さんから「引き揚げ記」を頂いた。貴重な記録だ。あの戦争のことはしっかり覚えておきたい。

2016.9.12 天職に打ち込む

私の職業観、特に天職について、強調しなければならないことは「自分の選んだ職業を天職と心得、その経験や知識を以て社会に奉仕すること（お役にたつ）が重要だ」ということだ。

自分の選んだ職業を天職だと感じることができるのは、①この仕事が好き ②この分野が得意 ③社会のお役にたつ この3つだと思う。社会的地位や報酬の多寡を求めないことは当然だ。

医者の家系に生まれた子どもは小さい時から医業につくことを熱望し、中高一貫私立校を目指して勉強する人が多い。ただ、頭脳を用いる仕事、専門的技術職を用いる仕事（profession）ばかりでなく、百姓（農業）や漁師（漁業）を天職だという人も大勢いる。天職といえども職業なのだ。

並々ならぬ向学心から天職を見つけた地元の知人を紹介しよう。

最初の1人は、高校卒業後、在阪の私立文系大学に進み、高校教員となり、自から希望して、主として都市部の夜間高校の教員になった。その間、土日と夜間に開講される私立大学の社会人大学院で学び、修士学位を得て、引き続き、国立大学社会人大学院・博士課程後期に進み、博士の学位を取得、高校教員を定年退職後は、念願かなって私立大学の教員になった。

2人目は、高校卒業後、私立文系大学・同大学院に進み、その

後、方向転換、医療技術（臨床検査士）の専門学校を経て、公立病院に勤務。定年を少し前に、私立医療系大学の教員になった。その後、国立大学・社会人大学院博士課程後期に進み、めでたく単位取得・満期退学となり、今も大学教員を続けている。

さらに、高校卒業後、私立文系大学に進んだが中途退学、いろいろな職業を経て地方の自治体議員になり、その後、学士の学位を得て、私立大学の社会人大学院博士課程前期で修士学位を得て、今はその知識を議員活動に活かしている人もいる。

高校や大学卒業後、最初に選んだ職業とは異なる分野に目覚め、「未経験分野に職を求めて一步を踏み出す強い胆力と、底の見えない深い悩みを乗り越え、自分がすべての責めを負う決断と孤独に耐え天職を掴んだ」努力を讃えたい。

2016.10.3 今日の朝日歌壇から

「ありがとよ」言葉残してあとも見ずサンダルばきで退院する人
（松原市 九木山恵） 選者：佐々木幸綱

選者評：ある一人の「今」をクローズアップして、それぞれの人生を浮かび上がらせる。短編小説の味わい。

⇒松竹映画『男はつらいよ』シリーズの「フーテンの寅」こと車寅次郎を思わせる歌だが、急性期病棟に入院すると、ときどき見受ける風景だ。特に外科系病棟に入院すると、骨折や怪我が完治すれば「はい、さようなら」「あばよ」と上機嫌で、あとも見ずサンダルばきで退院する人もいる。

それでも、手術直後には、後遺症など心配するのだが、2週間もすれば、その危惧は消えてなくなる。病気ではないが、産科では退院時に、お迎えにきた相方は「ありがと」「ごころうさん」の笑顔が一杯だ。

がんセンターに入院しても同じことだ。放射線治療は、通院治療が原則になるし、たとえ臓器の摘出手術をしても、ひとまず退院のケースが多い。予後観察への不安は尽きないが、この場合は「ありがとよ」言葉残してあとも見ずサンダルばきで退院したい気分だ。

病室のベッドに寝たまま髪を刈る頭の下に新聞紙を敷き

(三原市 岡田独甫) 選者：永田和宏 選者評：なし

病室のベッドに寝たまま髪を刈るのは長期入院の時だ。寝たきりの慢性期病棟や緩和ケア病棟、糖尿病専門病院に多い。お見舞いに来てくれる人も少なくなり、さびしいが、今日は、「頭の下に新聞紙を敷き 髪を刈る日だ」と思うとうれしくなる。わからないだろうなあ。この気持。

今から7年前、強度の腰痛を経て、化膿性脊椎炎で入院。リハビリ病院を含めて5か月半の長期入院を体験した。4年前には、前立腺がんの放射線治療で入院。昨年10月には、消化器がんの摘出手術で入院した。このほか、短期の検査入院もあり、重なる入院中の不安や心配ばかりか、入院中に見た入院患者の生活百景を思い出し、短編小説か随筆集にしたい気分だが、そのパワーはない。

2016.10.23 今日の日経歌壇から

若き日にガス溶接の免許とりあまり使わず老いてしまいぬ

(沼津 岩城英雄) 選者：穂村弘 選者評：なし

⇒特定の職業に就業するための専門能力を証明するために多くの資格や免許がある。法律に基づいて、各種分野における個人の能力、知識が判定され、特定の職業に従事すると証明される国家資格から、特別教育や技能講習を受けることにより、取

得できる資格までである。

日本の学校の教員になり学校で教壇に立ち、授業を行うためには教員免許状が必要だ。この資格は免許という。

この歌の作者が「溶接の免許」と書いているのは、建築現場などでガスを用いる溶接を行うための「ガス溶接技能者」だろう。この資格は技能者という

作者は、折角取得した「ガス溶接の免許」をあまり使うことなく老いてしまったことに未練が残るのだろう。

最近、AI（人工知能）やロボットの著しい発展により、製造現場や建設現場の技術者（いわゆる専門職人）の仕事が奪われている。工業高校や専門学校で学んだ知識が陳腐化し、不本意なIT作業を強いられ、ついて行くことができず、失業していく人も多い。

高度成長期以降、工業高校などの卒業生が、技術を取得して、その後、開業、今は町工場の経営者になって成功した人もいるが、IT化の設備投資と人材確保に乗り遅れた人も多い。

以上は、過去40年を特徴する時代の変化だが、私は、このまま、IT化、AIやロボットが「普通の人」の仕事を奪い、格差拡大につながり、政治不信にならないだろうかと危惧する。専門技術者ばかりか、アナログを支える普通の人々の働きで成り立っている業界や仕事なくなる懸念だ。世の中、理系人間のIT秀才で成り立っているのではない。

普通の人々が懸命に働き、家族を持ち、子どもを育てられる世の中にならないといけな。これを経済学流に言えば、「GDPは増えるが、できる人とできない人の格差が拡大し、国民の不満が増大してはいないだろうか」という。

米国大統領選でトランプ氏とクリントン氏の接戦の裏に隠さ

れた一面を見る思いがする。つまり、米国では、時代の流れについて行けず、ますます悪くなる暮らし向きに異議を唱えている国民も多いのだ。今、米国で起きている格差拡大を理由とする国民の批判が、今後日本でも起きることが杞憂に終わることを祈りたい。

2016.11.20 今日の日経歌壇から

残業の過多による自死過労死は女工哀史の現在版ぞ

(長野 山口恒雄) 選者：三枝昂之 選者評：なし

⇒女工哀史と言えば、細井和喜蔵著「女工哀史」1925年刊や、山本茂実のルポルタージュ「あゝ野麦峠」1968刊をイメージする。これは、明治から大正時代、諏訪の製糸工場に、周辺農村部の村々から連れてこられた貧しい農家の子供たちの労働を描いている。

多くの少女が半ば身売り同然の形で年季奉公に出され、朝の5時から夜の10時まで休みもほとんどなく、粗悪な食事、長時間労働、低賃金で過酷な労働に従事したといわれている。

この歌の作者は、女工哀史と昨年12月、東京大学文学部を卒業し電通に入社1年目の女性社員、高橋まつりさんが自殺した電通過労死事件と重ね合わせているようだ。ただ、イメージは少し違う。

電通は、並みの能力や学歴では採用されない超有名企業。初任給も高く、ボーナスを含めた年収でも全国トップクラス。高橋まつりさんの過労死は、電通の独特な職場環境が強制する長時間労働にあったが、それ以外にも、自己の能力への自信、周りの期待などのプレッシャーもあったのではないだろうか。女工哀史の現代版、「過労死事件」は絶対にあってはならないこと

だ。

この五階建ての広い本屋の中のどこかに運命の1行がある

(神奈川 九螺ささら) 選者：穂村 弘

選者評：こんな気持ちになることがある、一冊ではなく「一行」というところがいい。それによってめぐり合う可能性はゼロに近くなる。だからこそ「運命」なのだろう。

⇒五階建ての広い本屋にも、五階建ての広い図書館にも行ったことがないが、学生時代はJ R大阪駅前の「旭屋書店」。結婚後は子どもを連れて、阪急梅田駅近くの「紀伊國屋書店」に何回も行ったことを思い出す。余りにも、何回、あまりにも長時間、本の背表紙読みをするものだから、顔見知りになった店員さんが椅子を準備してくれたことを思い出す。

私の読書歴の中で、決定的な運命の一行にはまだ巡り合えていないが、自分で考え出した「人生夢浪漫」「乗り越えられない試練はない」「私の周りにはいつもよき理解者がいた」は、何度でも、どこでも訴えたい自信の一行だ。中でも真ん中の行で、運命どころか生命^{いのち}がつながっている昨今だ。

2016.12.2 魅力ある田舎 今日の日経から

本格的な人口減少社会に突入した日本。過疎化が激しい地方は今後、どうなるのか。自治体の「消滅」を避けるためにも時代に合わせて街を変え、自治制度も再点検する必要があるのだろう。

⇒民間の日本創成会議が、2014年に若年女性の人口に着目してまとめた報告書のポイントは、①全国の市区町村の半数は消滅しかねない ②規模の小さい市町村ほど人口減少が激しい の2点。

・日本創生会議によると2040年時点の若年女性（20歳～39歳）人口を10年前と比べると、減少率50%以上の都市が49.8%もある。これを「消滅可能性都市」と呼ぶ。

次に、2050年の人口減少率は、2010年比で、規模の小さい市町村ほど大きい。たとえば、北播磨の都市に多い人口1万人以下では、約50%。人口1万人～5万人では40%弱。人口5万人～10万人では30%程度となっている。

つまり、田舎の市町村はいずれ立ち行かなくなる可能性がある。しかし、「地方に行くで見かけるのは高齢者ばかりという姿は25年ごろから変わってくる」と東京大学教授の増田寛也先生が指摘する。

すでに、どこへ行っても高齢者ばかりで、シャッター街や空き家が目立つ自治体もある。「人口が減るので、移住者が増えなければ厳しい状況に変わりはないが、高齢者に充てた予算を少子化対策や産業振興に回せる余地が広がれば、地域の新たな姿を描きやすくなる」という意見も容認できる。

このまま無策で放置すれば「縮んでしまう地方」をどうするか。第1に「一定の人口はいても集落が過度に分散していると、物販業やサービス業は成り立ちにくくなる」。そこで暮らしに不可欠な施設は地域住民も参加し運営する必要がある。街からコンビニやガソリンスタンドが無くなれば生活ができないのだ。

第2に、教育や福祉関連の老朽化した公共施設はできるだけ複合化して縮小・更新する。住宅は生活関連施設に近い地域に誘導することが欠かせない。

・国土交通省によると、全国の300近い市や町が現在、商業や福祉、住宅など様々な機能を再編する「立地適正化計画」を策定中だ。無秩序な郊外開発に歯止めをかけて、街も「縮む」時代

に入った。

自然環境に優れた地方に移住する「田園回帰」は着実に広がっている。地方が消えるか否かは、地域の今後の取り組みにかかっている。

⇒魅力ある田舎になるために北播磨の都市は何をすべきか。

第1に重要なことは農業の担い手を増やすことだ。食える農業を育てない限り、先祖伝来の農地は荒れ果てた田畑と太陽光発電所の基地になる。

第2に重要なことは雇用の創出だ。SNSで消費者と直接つながる社会になれば、都市の立地条件だけで不利ということはなくなる。地方の需要は縮小するが、東京はじめ県庁所在地の需要を取り込むビジネスを創ることだ。

そのために自治体の行政のあり方を変える。合併してできた市町に多い複数の公共施設は集約し、病院などの施設はフル装備を考え直し、広域で運営する。地方議会のあり方の検討も必要だろう。

北播磨の市町が魅力ある田舎になるために、地域内で協調して行うことは多い。縮む時代の魅力ある田舎「北播磨はひとつ」なのだ。

2016.12.11 今日の朝日歌壇から

朝食にりんご夕食にみかんセンター試験まで二カ月を切る

（富山市 松田梨子） 選者：永田和宏、馬場あきこ

永田和宏評：最後の追い込み 頑張れ。

馬場あきこ評：命運を賭けたセンター試験へ向けて、りんごやみかんも力になりますよう。

⇒大学入試センター試験は、1990（平成2）年から始まった

大学の共通入学試験。かつての国公立大学共通第1次学力試験が名称を改め現在も続いている。国公立試験の第一次の関門だ。

現在、高校卒業生の過半数が大学に進学する。従ってセンター試験は、文字通り命運を賭けて戦う試験なのだ。受験生諸君、しっかり頑張れ。

ところで、現在の日本社会の顕著な特徴は「深刻な格差」だ。日本の強みであった「一億総中流」は、すでに崩壊し、格差は広がっている。

最近の欧米の「格差」については、英のEU離脱、米のトランプ大統領の選出などの新聞報道でよく知られているが、日本とて同じことが起きている。

さらに分析すると、格差は、個人間のみならず、企業間、業種間、地域間でも明らかだ。最も深刻なのは「地域間格差」だ。人口減少、少子化の波と長引く不況による地方経済の衰退は地方都市（特に田舎）への影響が最も大きい。

この原因の一つが、大学進学率の向上だ。センター試験や私立大学入試を経て、多くの人々が都会の大学に進学、そのまま、都会で職を求め、結婚し、子どもの教育は都会で行われる。

子どもにとって、生まれた時から両親のふるさとは年に数回の旅行先。当然、都会っこになる。定年退職後、田舎暮らしを求めても「おとうさん、おひとりどうぞ」。連れ合いまで同じことをいう。先祖のお墓まいりなど何年も前のことだ。私の大学の同窓から何度も聞いた話だが、どこにでもある風景だ。

ただ、この現象を以て「好ましくないことだ」とも言えない。格差の最初の関門が進学にあることは全世界共通だ。誤解のないようにしたいが、「成功するために大学に入る必要はない。ただ現在の日本では過半数の子どもが大学に入る」ことをも念頭

においておきたい。

将来の地域を支える地元志向と地域貢献に、地方の若年層をどのように取り込むか。地域活性化のために彼らに（結婚、子育てから職場や活躍の場、経営資源、市場など）何が提供できるか。地方に人を呼ぶ政策に最重点をおかない限り、地域からヒトもモノもカネも逃げてしまう。

この豊かな土地「北播磨」の市町に住んでいては、四国の田舎や吉野の山奥から都会の大学に入学した同窓の自嘲談は理解してもらえらるだろうか。

2016.12.12 日経歌壇から 日経2/11

退院の妻が厨に林檎剥くその香は居間のわれを包^{くも}容めり
(横浜 大建雄志郎) 選者：三枝昂之

選者評：妻が退院した安堵感。元の暮らしに戻った幸福を象徴しているのが厨に立って剥く林檎の香り。自分が剥いてあげたらどうかといった反応もあるかもしれないがそれはそれ。ここでは戻ってきた当たり前の暮らしが大切。

⇒私は、今秋、後期高齢者になった。中学、高校時代を北播磨で共に過ごした同窓の約20%が亡くなっている。がん経験者も20%はいるだろう。配偶者を亡くした人もこの位はいると思われる。

平均余命が伸び、長生きする時代になったと言っても、後期高齢者になるのは全体の80%くらいだ。統計的には、人は70歳を過ぎると亡くなる割合が増え、毎年今頃になると家族から「喪中葉書」が届く。

配偶者がいる老々夫婦の家庭でも、双方ともに無病息災、毎日、健康で元気に過ごしている人は、多くても80%くらいだろ

う。つまり、「何でもない当たり前の暮らし」は本当に幸せなのだ。

私の場合、妻は今までに眼科の手術や突発性難聴の治療で3回入院した。いずれも2週間程度の入院であったが、私には、厨に立って林檎の皮を剥くどころか、家事一切を行わない普通の生活が壊れ、随分難儀した経験がある。

当たり前が幸せどころか、当たり前でないと生活が壊れてしまうのだ。妻に感謝の言葉など恥ずかしく、もっと先のことにしたいが、この歌の作者の気持ちには同感だ。

昨年の春から、叙勲受章（4月）、引き続き母親の葬儀と法要（5月～）、受章祝賀会（9月）と祝儀・不祝儀が続き、その上体調不良が続いた。

昨年8月、西脇病院に入院、検査などの経緯を経て、10月、兵庫県立がんセンター消化器外科に移りがんの摘出手術を受け、11月に退院した。

幸いにも、偶然にも、初期に、患部を摘出できたので、再発もなく元気になり、毎日事務所に出ている。5年間に、二つのがんを経験したが、本当にありがたいことだと日々感謝している。

日頃、当たり前と思っていることが、当たり前にできなくなった時、本当に当たり前に生活出来ることがどれほど幸せなのか痛感させられる。「戻ってきた当たり前の暮らしが大切」という評者の意見が身に沁みる。

2016.12.19 今日の朝日歌壇から

野心なき生つまらぬと子に語るわれにありきありて潰え
き
（名古屋市長尾幹也） 選者：馬場あき子

選者評：かなしき父の告白。野心もてとはつまり現代的な大志である。我が子への求めを自らの身に省みた時の悲哀が心に沁みる。

⇒この歌の作者は定年退職後の平均的サラリーマンだろう。私の大学の同窓の状況を思い出しながら所感を書いてみよう。私たち昭和40年3月卒は、ほとんど全員が上場会社に就職した。大学院に残った者、自営業に就いた者は極めて少数。公務員になった者はいない。つまり、現在と全く同様の「就職天国」の時代。ただ、強い公務員志向はなかった。

サラリーマンになった者はほとんどが総合職で、職場は生涯全国区。商社に就職した者は、大半が海外勤務経験あり、子どもは「都会っこ」がほとんど。

彼らが子どもに「野心なき生つまらぬ」と語ったかどうかは分からないが、その子どもも、また、ほとんどがサラリーマン。

私は子どもが女の子ばかりだったこともあり「野心なき生つまらぬ」と子に語った記憶はない。むしろ、子どもは自由に育てたと思う。ただ、長女だけは、大学入学時に商学部を選べと言ったことと卒業時に専門学校に行き税理士になってほしいと希望を伝えた。

「野心もてとはつまり現代的な大志である。我が子への求めを自らの身に省みた時の悲哀が心に沁みる」という選者評を読みながら、いまだき、わが子どもにこんなことを言う人がいるのだろうか。現代的な大志が「野心」などと言う親がいるのだろうかとも思う。

親も子どもも「安心・安全・堅実」の公務員や優良大企業就職を願うのではないだろうか。特に、公務員試験では、事務系公務員ばかりか、現業公務員、さらに警察官、消防官、教員な

どの競争倍率は格段に高い。公務員であれば、たとえ非正規でも倍率は高い。大志を抱いて海外に留学する者など極めて少数だ。

小池百合子東京都知事のマネをして、いったん入った関西学院大学を2年で退学、アラビア語の研修のためにエジプトのカイロ大学に留学する女性など皆無だろう。小池さんの頭の中は、今なお、安心・安全・堅実志向は微塵もなく「大志」のマグマがいっぱいなのだ。

しっかり世相を捉えないと現代の若者を理解できない。今の若者は、親の生活を見て「(そんなに) 頑張らなくてもよい普通の生活」の快活さを知ってしまったのだ。従って「自らの身を省みた時の悲哀」に心が染み入ることはない。今の日本は「普通が一番」「安心・安全・堅実」が最高の幸せなのかも知れないのだ。

2016.12.22 アベノミクス・開幕

アベノミクス開幕前夜から開幕直後を時系列に整理すると以下の通り。

- ・2012年11月14日、野田首相衆議院解散宣言（日経平均株価：8,661円 1ドル80円）
- ・2012年12月16日、「年間2%の物価上昇目標（インフレ目標）を明確に設定して、日銀法の改正も視野に、政府・日銀の連携を強化する仕組みを作り、大胆な金融緩和によってデフレ・円高からの脱却をはかる」ことを選挙公約として掲げた衆院選で自民党圧勝、第二次安倍政権が誕生した。
- ・2012年12月20日、「物価目標」検討
- ・2012年12月26日、安倍内閣発足

- ・2013年1月11日、緊急経済対策決定
- ・2013年1月22日、「物価目標2%決定」
- ・2013年2月25日、次期日銀総裁人事案決定（日経平均終値：11,662円、1ドル91.88円）（2013.02.26 株価乱高下の危うさ）。

安倍総理は、衆院選前からリフレ政策を次の内閣の主要テーマにすることを決めた。私は、2012年末、多可町中区のベルデイホールで開催された藤井比早之議員の選挙演説会に出席し、総理から直接「お札をじゃんじゃん刷って、経済をインフレにして景気をよくします」と聞いた。これは面白いことになる…と直感。以後、毎日「アベノミクス」をテーマにブログを書くことにし現在まで続いている。その後、安倍政権の経済政策は「アベノミクス」と呼ばれ、(1)大胆な金融政策(2)機動的な財政政策、および(3)成長戦略という「3本の矢」から成り立っていると説明された。

・昨年末に政権が交代して、デフレ脱却政策として（短期的には）「金融緩和政策」、「物価目標2%」大型補正予算による「財政出動」が同時に実施されることになり、市場では、急激な円安、株高が進み、景気の先行きに明るい光を投げかけている。

問題1、安倍政権は金融政策を日銀の自主性に任さず、政府との協定（アコード）のカタチをとり、インフレ目標2%を日銀に押し付けることは正解か。輸入インフレが先行してコストアップ型インフレになり、賃金は伸びず、実質賃金は低下するのではないか。

問題2、私は、安倍首相の円安政策は、上記の課題はあるが評価している。しかし、公的債務残高が1,000兆円に膨らむ中で、の超大型補正予算による財政出動により、長期金利が上昇し景気が回復しても、税収増加よりも金利支払いが多くなり、日本

の財政がもたなくなるリスクも大きい。

問題3、長期的政策としての「民間投資を喚起する成長戦略」の中身は、従前の政策と何がどう違うのか。先祖がえりのバラマキにならないように、さっさと早く実行して欲しい。

アベノミクスの問題点を指摘して、安倍政権の政策を批判する意図はないが、しっかり議論をフォローしたい。

私はアベノミクスに期待しながらも「その問題点」についても意見を書いている。アベノミクス開幕直後は、期待と不安が入り混じっていたのだ。

2016.12.23 アベノミクス・初期の成果

4日の衆議院議院運営委員会で、日本銀行の次期総裁候補の黒田東彦・アジア開発銀行総裁が所信を述べた。主な発言は次の通り。

・【2%の物価目標】日銀が2%の物価安定目標を、政府との共同声明でコミット（約束）したのは極めて正しい。2%の早期実現は可能で、日銀の使命だと確信している。多くの中央銀行は（達成期限について）2年程度を念頭に置いており、それを目指す。

・【金融緩和の手段】（国債などを買い入れる基金規模が）来年末に111兆円、15年以降も111兆円といったレベルで推移する程度の（現在決まっている）緩和では明らかに不十分。量的にも質的にもさらなる緩和策が必要。（国債などの買い入れの）前倒しを当然検討する。買い入れ対象（年限）を1～3年に限る必要はなく、もっと長いものを買うことを検討してよい（日銀の長期国債保有額が紙幣の量を超えないようにする）。銀行券ルールも当然、（見直しの）検討対象になる。

・【日銀の独立性】日銀の独立性は法律で確保されている。私は財務省に長く勤務したが、離れて10年になる。（政府や政治家との）距離感も十分認識している。日銀による国債の直接引き受けは戦前、戦中の経験に鑑みて、財政法で禁止されている。国債を直接引き受けることは全く考えていない。

・【賃金、雇用】賃金と雇用が今後どうなっていくかは極めて大きな問題。物価上昇と平仄^{ひょうそく}があった形で賃金と雇用が早期に改善していくようにしなければならない。それは政府と日銀の課題だ（朝日新聞2013/3/5から）。

アベノミクスの「第一の矢」大胆な金融政策は、後に「異次元の金融緩和」と呼ばれることになるが、その主な内容は「2012年4月の段階では138兆円であったマネタリーベースを2年間で2倍の270兆円に増やし、その内訳は主として長期国債を購入することによって達成する」というものであった。その後、日銀はこの計画どおりにマネタリーベースを増やした。

日銀の緩和政策が実施されて以降、為替レート、株価、雇用に顕著な望ましい変化が現れた。

アベノミクス開幕から1年間に私が書いた主な所感は以下の通り。アベノミクス奏功への期待と不安を感じながら慎重に判断していると自負している。

アベノミクスの奏功を信じたいが、最近の日銀批判の後退と、超特急の金融緩和には「危うさ」を超え、不安さえ感じる。日銀の慎重で懸命な情報分析と判断を祈りたい。

・大企業の生産、出荷増が指数上昇のエンジンになっている。中小企業や地方都市にはまだまだ先のこと。これだけ好指数が並ぶとオール日本で「アベノミクスの思考停止」になる。慢心はいけない。「治にいて乱を忘れず」常に、現場対応を怠らない

ようにしないと、世界で何が起こるか分からない。毎日の株価、為替、金利などのマーケット情報から目が離せない（2013/8/30 好景気指標のオンパレード）。

アベノミクスの採点の視点はそれぞれに異なる。金融緩和は景気の回復という点では成功しているが必ず出口政策が必要になる。財政政策の効果は短期的で中長期的効果は少ない。問題は成長戦略、未だ矢筒の中にあるという第3の矢を早く放つことだ。アベノミクスはまだ道半ばである。

2016.12.24 アベノミクス・消費増税

安倍晋三首相は1日午後、首相官邸で開いた政府・与党政策懇談会で、来年4月から消費税率を8%に引き上げると表明した。「国の信認を維持し、持続可能な社会保障を次の世代にしっかり引き渡していくため、消費税率を5%から8%に引き上げる判断をした」と述べた。

同日夕の閣議で消費増税に備えた5兆円規模の経済対策を決定する。設備投資や賃上げを促す企業向け減税が柱で、消費増税に耐えうる経済環境を整える狙いだ（首相、消費増税を表明 日経2013/10/1）。

2014年4月の消費税増税は、2012年に野田政権下で、民主党と自民党と公明党の3党合意で、「消費税を2014年4月に5%から8%へ、さらに2015年10月に10%へ引き上げる」ことを法律で決めた。安倍首相はこれに基づいて「予定どおり」安倍政権下で実行すると表明した。

この増税が結果的にマイナス要因となり日銀の金融緩和効果を相殺した。この経験を踏まえ、安倍政権はノーベル経済学賞受賞者であるクルーグマンやスティグリッツを日本に招聘して

助言を求め、2015年10月の増税（8%から10%）を2017年4月まで延期し、さらに19年10月に再延期することを決めた。

この間、私は一貫して「消費増税延期にも再延期」にも反対しているが、それは、もっと後のことだ。私の理解の基本は「アベノミクスによる景気回復も重要だが、財政健全化への道筋を明確にすることももっと重要だ」「2025年になれば、団塊の世代が後期高齢者入り、社会保障費の大幅な増加が見えている」「もともと、財政悪化で日本国債の信認が地におちるリスクが無いとは決して言えない」。また「増税延期はしょせん消費増税先送りに過ぎない」という理由だ。

ただ、2014年に行われた消費増税がアベノミクスにマイナスの影響を及ぼしたことは理解している。これを毎年末に書いている「データで見るアベノミクス」から整理すると、アベノミクスが開始される前の2012年の日本経済は、明らかに「デフレ不況」状態であったが、アベノミクスが開始された2013年からは、名目成長率も実質成長率も高く、インフレ率もまだマイナスとはいえ、デフレ脱却に向かっていった。

ところが、2014年には、名目成長率が1.5%であったのに、実質成長率がマイナス0.9%になってしまった。これは、2014年4月に5%から8%に消費税が引き上げられたことにより物価が上昇したことによる。

もし名目GDPの成長率がゼロならば、消費税増税による2.4%の物価上昇は2.4%実質GDPを低下させるはずであるが、日銀の金融緩和の効果もあり1.5%名目GDPが成長したので、実質GDPの低下が0.9%にとどまったのだ。

2016.12.26 アベノミクス・大学改革

文部科学省は2016年度から、全国に86ある国立大学を「世界最高水準の教育研究」「特定の分野で世界的な教育研究」「地域活性化の中核」の3グループに分類する。グループ内で高い評価を得た大学に、運営費交付金を手厚く配分する。

従来は規模に応じて機械的に割り当てられていた。大学の特色を明確にし、同じグループ内での競争を促す狙いがある（国立大を3分類 日経12/18）。

私は兵庫教育大学に「産業教育学部」（学科）を創設し、教員志望以外にも就職する学生を受け入れ、経済、簿記・会計、経営、産業心理など教員免許にこだわらない講座（ゼロ免コース）を開講し、北播磨の「地方創生」に貢献することを期待している。

「地域活性化の中核となる大学」を選んだ場合、「地域ニーズに応じた人材分野や地域企業との産学連携を担う。特定分野では世界的な教育研究を行う」ことになるが、兵庫教育大学が「世界的な最高水準の教育研究を目指す大学」や「特定分野で世界的な教育研究を目指す大学」を選んだ場合、私の提案はなくなる。小さな新聞記事ではあるが、地域住民として関心を寄せている。

・今後、少子化が進み、学生数の減少が予想される。あと5年で教員採用枠は激減する（日経12/10）。1県1国立大学構想で、神戸大学・加東キャンパスになる可能性もある。このような状況の中で、私の意見が、建学の精神に反し、新学部・創設が不可能であれば、私の提案は空振りになる。

私は、2015年以降、兵庫教育大学に「地方創生学部（学科）」の創設を期待する意見を書いた。

・国立大地域学部（2015/10/4）では、全国各地の地方大学が

続々と「地域」を冠した学部を創設していることを紹介し、「兵庫教育大学には、教員養成大学としての使命と縛りがあるが、山形大学では「地域教育文化学部」が2005年に創部され、地域と連携した教員養成を行っている例が参考になる」とまで書いた（このほか、高知大学・地域協働学部など計8大学が地域学部を創設した）。

私の意見が空振りになったことを知ったのは、2016年5月17日のことだ。

・今朝7時のNHKニュースで、「文部科学省は平成27年9月に国立大学の機能強化の観点から3つの枠組みを設け、平成28年度以降はその枠組み内で高い評価を得た大学に予算（運営費交付金）を重点的に配分することを取り決めたことと、その評価結果、さらに宮崎大学や鳴門教育大学の地域貢献への取り組みが報道されていた（国立大学評価 2016/5/17）。

兵庫教育大学は、重点支援①に分類され、研究分野が教育に限定されている。「兵庫県を中心とした教育委員会や学校等の教育機関との教育研究、研修、子育て、学校ボランティア等、あらゆる面における連携はもちろんですが、特に学部同窓会と大学院同窓会との連携は重要であると考えている」（兵庫教育大学のHPから）という福田光完学長の決意には、教育分野以外の地域貢献への熱意が感じられず、残念な思いがある。

日刊紙やNHKで何度も報道された地方国立大学の地方創生学部の創設事例や地域連携事業から、地方の国立単科大学と、地元の地方自治体との提携、支援、協力のあり方を考え直したいものだ。